
らきすた in 戦国時代 第2章

sibugaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らきすた in 戦国時代 第2章

【Nコード】

N7632Q

【作者名】

sibugaki

【あらすじ】

らきすた in 戦国時代第1章の続編
今回から更に色々なキャラを出そうと思っています
果たして鬼とは一体何なのでしょう？
そして泉家を襲った悲劇とは？

時は遡り（前書き）

軽く時代が飛びます

時は遡り

それは今から去る事遙か昔

場所は分からぬがとある都にそれはそれは玉のように美しい娘が居りました

その娘のいた家は都一と言える大富豪の家の娘でした

家の主はその娘に似合う婿を探していました

そして都中から集めた選りすぐりの男達を自分の娘の前に差し出したのです

皆口々にこう言いました

『是非、私の妻になって下さい』
と、

ですが娘はどの男にも首を縦には振りませんでした

彼女には分かっていたので

どの男達も私になど興味が無い

興味があるのは娘の家、権力、金

それでした

ですので彼女は頑として首を縦に振りたくなかったのです

誰も私を心から愛してなどいない

勿論、彼女の父も・・・

そう、父が連れてくるのはどれも名のある武将や貴族、名族、果ては時の権力者にまでなっていました

どれも皆権力の持ち主でした

美しい娘は時として武器になります

ですから父は誰にも首を振らない娘に怒りました

「何故誰の嫁にもならないのだ！何が気に入らないのだ！」

父は怒鳴りました

すると娘はこういいました

「誰も・・・私を心から愛してなどいないからです」

と、

それから暫く経ったある日、娘は一人山の中を歩いていました
特に目的などありません

只歩いていただけでした

しかし、そうしていると忽ち娘は道に迷ってしまいました
辺りは皆同じ木々に見えました

その為自分が何処を歩いているのかさえ分かりませんでした
するとどうでしょう

娘の前に一頭の腹を空かせた熊が現れたではありませんか
熊の目は血走っていて、今にも娘に襲い掛かるうとしていました
娘は恐怖に駆られ、すぐにその場を離れようとしていました

しかし、恐怖でもつれた足が絡みその場に倒れてしまいます
そんな倒れた娘に熊は血走った眼を向け牙を光らせました

熊の口から肉の腐った匂いと血の匂いがしました

自分もまたこの匂いを出す一部になるのだらう

そう思い娘を両手を胸の前に合わせ目を閉じました

しかしその時でした

突如熊は何かに恐れるかのように娘から離れ森の奥に逃げてしまっ
たのです

娘はキョトンとしていました

何故熊は私を襲わずに逃げたのだらう

そう思えたのです

そして、その原因は娘の元へと近づいてきました
ノッシノッシと地面を揺らして近づいて来ました
そして、其処に現れた者を娘は見ました

肌の色は褐色が良く

筋骨隆々の体をしており
腰には虎柄の腰巻を巻き

人の背の何倍はあるであろう金棒を軽々と持っており
頭には一本の角が生えており
長く蒼い髪をしていました

そう、娘の前に現れたのは一人の「鬼」だったのです
普通の人なら鬼を見た途端声を上げて逃げ惑う筈です
ですがこの娘は違いました

「どうして私を助けてくれたの？」

と、娘は鬼に聞いたのです

それには鬼自身も驚きました

当然でしょう

今まで鬼は人々に恐れられていた為こうして話しをした事は始めて
だったのです

ですが、鬼は多少驚きが残りながらも娘に言いました

「別に助ける気では無かった。偶々熊がいたので食べようと思った
だけの事だ」

いかにも鬼らしい事を言う

そう娘は思いました

「娘よ・・・何故私を恐れないのだ？人間は私達鬼を見れば恐れる
筈だが」

鬼は疑問に思った事を娘に聞きました

すると娘は答えました

「恩人を恐れる人など居ません。それに、貴方はとても優しい目を
しています」

そう娘が言ったのだ

すると鬼は首をかしげた

どうやら言葉の意味が分からないのでしょうか

「面白い女だな」

鬼はそう言いました

すると娘も返しました

「貴方も面白い方ですよ」

娘は笑いながらそう言った

それを見て鬼もまた笑ったのでした

それから娘と鬼は度々出会っていました

その度に娘と鬼は楽しそうに会話をしていました

鬼と娘は毎日のこの時をとて楽しんでいました

こんな時が何時までも続けば良いのに

そう二人は思えました

ですが、そんな二人の思いは余りにも脆く崩れ去ってしまいました

二人の関係を偶々見てしまった娘の父が激怒してしまったのです

そして娘を部屋に閉じ込め二度とあの鬼の出る森に近づけぬように
してしまつたのです

更には父が勝手に選んできた男と娘を結婚させようとしたのです

娘は泣きました

もうあの鬼に会えない

そんな悲しみが娘を包み込みその涙は三日三晩続いても止む事はあ
りませんでした

また、その悲しみは鬼も同じでした

鬼もまた娘を愛してしまつたのです

鬼の胸にはポツカリと大きな穴が開いたようでした

そして鬼もまた娘と同じように泣き続けました

ですが、泣いてるだけでは駄目だと鬼は悟り金棒を片手に立ち上が
ります

そして、丁度満月の日の夜でした

娘が泣きつかれて眠っている時に、突如娘のいる部屋の壁を壊して

あの鬼がやってきたのです

それを見て娘は久しぶりの笑顔を見せました

またあの鬼に出会えた

そんな思いが娘の中にあつたのです

そして鬼は娘に手を差し出しました

「一緒に行こう」

鬼は言いました

娘はそれを二つ返事で受けました

「はい、喜んで」

娘は鬼の大きな手を取り二人で家を抜け出しました

娘が鬼に攫われた事を知った父は町中を駆け回り腕利きの用心棒を雇い娘を探させました

その結果、父親は娘と仲良くしている鬼を見つけました

其処は自然に出来た岩場に簡素で作った家の前でした

しかも娘のお腹には僅かに脹らんでいるのが見えました

それを見て父親は確信しました

自分の娘は鬼の子を宿した・・・と

それを見た父親は頭に血が上ってしまいました

そしてある時、鬼が家を留守にしている間に家に居た娘を無理矢理連れ帰ってしまったのです

そして家に辿り着いた父親は娘を中に居る子供ごと庭先で大きな木で縛り上げました

「お前はもう家の娘ではない！お前はもう鬼だ！」

父親はかつての娘に対しそう言い放ちました

そしてその娘の胸に木で出来た杭を打ち込んでしまったのです

娘は最後に鬼の名前を叫びそのまま息絶えてしまいました

その叫びを聞いて鬼が屋敷に駆け込んで来ました

しかし、其処で見たのは縛られ胸に大きな杭を打ち付けられ目を開けなくなってしまった娘の姿でした

鬼は娘の亡骸を抱いて大声で泣きました

その目からは大粒の涙が零れました

やがて、涙が流れなくなつた時、その鬼の目が真っ赤になりました
そして鬼の髪が青い髪から赤い髪に変わり回りが炎で燃え上がりま
した

鬼の心を今満たしていたのは自分の妻である娘の命を奪つた人間達
に対する憎しみでした

怒り、憎しみ、恨み、その感情が鬼の中で激しくぶつかりあつてい
ました

鬼は目に見える人間を焼き殺し、人間の住処であつたのを焼き払い、
かつて娘が住んでいた都を一夜の内に焦土に変えてしまいました
無論、娘の父親も其処に住んでいた者たちも全て灰になりました
ですが、それでも鬼の心の痛みは消えませんでした

鬼の手には眠つたように死んでいる娘が抱かれていました

黒く長い髪をしており雪のような肌を持った美しい娘が今鬼の中で
亡骸となつて其処に居たのです

鬼は娘の亡骸を持って山に戻っていきました

もう、人間と関わりあいたくない

もう、人間と会いたくない

そう思っていたのです

住家に戻つた鬼は其処で驚くべき事態に襲われました

なんと、死んだ筈の娘の中から元気な赤ん坊が生まれたのです

自分と同じ蒼い髪をしており顔は娘と同じ美しい顔立ちをした女の
子でした

鬼はその子を抱き上げました

娘が・・・妻が残した二人の子供

鬼はその子を大事そうに抱き締めました

そして、自分の家のすぐ横に娘の墓を作りその子と静かに暮らそう
と思いました

ですが・・・その幸せも長くは続きませんでした

娘と鬼の間に子供が生まれてから約10年の月日が流れたある日の

事でした

娘が森の中を遊んでいるとその先の道を馬に乗り武装した侍達が歩いていました

娘は初めてそれを見ました

自分とは違う黒い髪

見た事が無い母もまた黒い髪だったと言います

一体何をしに行くのだろうか

そう思えましたやがて、侍達の向かった先では黒い煙が上がりましたそれも一つではなく何個も上がっていたのです

娘は気になりその場所へ向かいました

其処では似たような格好をした別のお侍達が居ました

それらが互いに刀を持ちお互いを切りあい、刺しあい、殺しあっていたのです

娘は怖くなつてその場から逃げ出しました

そして父の居る家に戻ってきました

しかし、其処にあったのは数名の侍の亡骸と背中に刀を刺され全身血まみれの父の姿がありました

娘は涙を流しながら父親の元へ駆け寄りました

父親は既に息も絶え絶えでしたが娘を見てこう言いました

「御免な・・・せめて・・・お前だけでも・・・幸せになつておくれ・・・」

そう言い残すと父親は静かに息を引き取りました

娘は動かなくなつた父親の亡骸に抱きつき大声で泣きました

静かな森がそんな少女の鳴き声を聞いていました

その後、その娘の行方は未だに謎であります

しかし、それから約千年経った後、かつて都があつた近辺には青い髪をして特殊な力を持つ集団「鬼」が住み着くようになったのです。その鬼達は人里から離れ、皆下界とは接する事なくひっそりと暮らしていました。

しかし・・・

時は遡り（後書き）

以降元の時代に戻ります

詳細設定

第1章からの登場人物

- ・ 泉こなた
- ・ 柊かがみ
- ・ 柊つかさ
- ・ 高良みゆき
- ・ 日下部みさお
- ・ 峰岸あやの
- ・ 前田慶次
- ・ 奥村助右衛門
- ・ 前田利家

第2章からの登場人物

- ・ 小早川ゆたか

前田家と同盟を結ぶ「小早川家」の一人娘

とても病弱で何時も城の中で生活している

こなたや慶次とは仲が良かったまに遊びに来ては良く遊んでいる

城の中には同年代の友達が少ないらしく少し寂しがりな面もある

・小早川ゆい

ゆたかの姉

妹とは違つてとても活発な面を持つ

誰にでも明るく接する為城の中でも彼女を嫌う人間は居ない
お抱えの武士に只今恋愛中でもある

・成美きよたか

ゆいの護衛をしている武士であり彼女が幼い頃から側を守ってきた
故に二人は結構仲が良い

剣の腕前は慶次と同じ位であるが、外見からはそんな風には見えない
普段は気さくな好青年のような人である

・岩崎みなみ

流浪の侍であつたが、独眼流と言われる伊達政宗に仕える事になった

自分を召抱えてくれた正宗に絶対な忠誠を誓っており彼が死ねと言えど躊躇い無く死ねる覚悟を持つ
一見冷めた印象を持っているがその内は優しく思いやりのある面もある

神速の剣の持ち主であり居合い切りが得意である

・伊達政宗

歴史上の人物

片目を病気で失い常に眼帯をつけている

その為母から嫌われ辛い子供時代を過ごしてきた

その為人を常に疑っている

だが、自分に絶対の忠誠を誓っているみなみや小十郎には心を開いている

・泉ゆづた

こなたの弟

何故彼が生まれたかは未だに謎だが同じ母から生まれたのは事実で

ある

人間に対して余り良い印象は持つておらず姉を早く自分達の居る里に引き連れようと思つても居る一方で人間に興味を持つている
好奇心旺盛であり良く物を盗む
見つかつて人間では捉えるのはまず無理である

・頭領

ゆうたが叔父と呼ぶ男

鬼の一族を統べる者でありこなたとゆうたの母の実兄だと思われる
厳しい性格ではあるが仲間には優しい

しかし人間に対しては容赦がなく里に入った人間は全て彼の手で血祭りにあげられた

こなたの母と人間の父との結婚も最後まで否定していたのはこの頭領である

何故頭領が人間を嫌うのかは、過去に起こった悲しき事件がきっかけだと思われる

・鬼の力

蒼い髪を持つ鬼達はそれぞれ特殊な力を持つ
妖力ともとれる力であり自然の力を扱う

・火

自然発火などを起こせる力であり最も強い力であるが、制御が一番
難しいのもこれである
その為この力の持ち主は暴走し易くとても危険なのである

・風

突風を巻き起こす事が出来る力であり火に比べると力こそないが暴
走の心配もない
その上比較的妖力を余り使わないのもこれである

・水

空気中にある水分を集めて力に変える能力
火を覗くと殺傷能力が高いのはこれ
水分を凍らせて氷の刃にして飛ばす事も可能である

・地

大地の力を使う能力

この力の持ち主は怪力が多い

自然の力を駆使して自身の傷を癒す事も可能

・天

鬼の力の中では珍しく他人の傷を癒したり万病を治したり出来る能力
その変わり他人を傷つけることは出来ない

・闇

鬼の力の中でも禁忌とされている力
その力は最も危険でありそれを使えば全ての人が滅びるといわれている
が真相は誰も知らない

鬼達はそれぞれ上で紹介した能力を一つだけ持つ

だが、稀に全ての力を持つ鬼も居る

また、天と闇の力を持つ者は極端に少ない

特に闇の力の持ち主は10万人に一人の割合でしかない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7632q/>

らきすた in 戦国時代 第2章

2011年10月7日03時13分発行